愛知教育大学大学院　平成 28 年度修士論文抄録

授業内の書く活動に必要な日本語指導
―外国籍児童第 3・4 学年を中心に―

日本語教育領域　　北野　記子

キーワード：日本語教育、外国籍児童、書く活動

序章　研究目的

近年、急速な国際化や平成２年の出入国管理法及び難民認定法の改定により、来日する外国人が増加してきている。そのような中で、日本の公立学校にも、様々なルーツを持つ子どもたちが存在するようになり、互いに学び合うようになった。それゆえ、これまでの「日本語を話すことができる、理解することができる」ということが前提となっていた日本の教育は、日本語を話すことも理解することもできない子どもたちに対しても教育を行う必要が出てきた。それゆえ、今後は、多様化する子どもたちが存在する学校現場で、文部科学省が提唱している「確かな学力、豊かな心、生きる力」を養うために、どのような教育をしていくか考えていかなければならない。そして、どの児童・生徒にも等しく、「確かな学力、豊かな心、生きる力」を保障していかなければならない。

そこで本稿では、特に授業内の「書く活動」に焦点を絞り、そこで使用されている日本語の実態や求められている力を明らかにし、さらに、現在行われている外国籍児童生徒に対する支援方法とそれによって生じた変化をみることを通して、外国籍児童生徒が授業に遅れることなく、学習内容を理解し、参加するために必要な日本語指導の在り方を検討していく。

１. 研究調査方法及び研究対象と先行研究

1.1　先行研究

本研究の目的に関する先行研究は、大きく分けて２つあると考える。

１つ目は、教科学習に関するものである。教科指導に関する研究には、算数科、理科を中心として勝原（2001)、河口（2004)、菊地（2012）によるものがある。これらのいずれの研究も、在籍学級で行われる授業での日本語の実態を調査し、さらに、発問形式を統一するなど、在籍学級で外国籍児童が授業を受ける際に必要な支援を提案している。しかし、いずれの研究も対象となる教科が絞られており、教科による共通性がみえていない。それゆえ、今後は教科による共通性からも考えていく必要がある。

２つ目は、書くことに関するものである。書くことに関する研究には、藤田・田村（2012）による作文事例の研究がある。児童が書いた作文を収集し、どのような誤りが生じやすい

か調査したこの研究は、書く活動でどのような力を必要とするかを考える上で参考になる点が多い。しかしながら、藤田・田村（2012）による研究は、作文のみを対象としており、問題に対する答えの記述など他の書くことに関する研究が含まれていない。

また、文章を書く力を養うための指導方法を考察したものには、宮崎（2015）のものがある。大学生が書いた作文を調査し、どのような力が必要かを研究したこの研究は参考になる部分が多い。しかしながら、宮崎（2015）の研究は、対象が大学生であるため、そこで明らかになったことと本研究が対象としたい児童に求められる力や実態とは異なると考えられる。ゆえに、対象を児童にあてた研究を進めることが必要であり、文を書く力の育成を考える上で重要であると考える。

また、外国籍児童に対する指導に関する領域において、「書く」という点に焦点を当てた研究はまだ少なく、今後は「書く」という観点に焦点をあてた指導方法を考える必要があると考える。以上の課題を踏まえ、本研究では、「書く」活動に参加するために必要な力と、その指導方法の在り方を考えていく。

1.2　研究方法

本研究では、以上の先行研究からみえた課題を踏まえて参与観察を行った。

調査期間は、平成２７年１１月から平成２８年９月までの１０か月間である。その期間に行われた授業に参与観察し、週２~３回、１回につき４時間程度、授業の様子を観察させていただき、そこで使用されている日本語や子どもたちの様子を調査した。

本研究の目的は、参与観察を通して、現在の授業内の言語使用の実態や授業内で求められる日本語能力を明らかにし、またそこで行われている支援によって、子どもがどのように変化したのかを調査し、外国籍児童生徒にどのような日本語指導を行うべきか、その在り方を探ることである。この目的を意識したうえで、本研究では、データの収集にあたって、発話をフィールドノートに記録し、日本語能力が異なる外国籍児童３名の個別の能力に合った指導方法を考察した。

1.3　研究対象

本研究では、研究対象を文章の構成の仕方など、書く力を養うよう指導し始める学年である第３・４学年の外国籍児童に絞り、検討していく。日本語指導が必要な児童が多く存在し、全国的にみても、外国籍児童が多く存在している県である愛知県にある A 小学校に調査協力を依頼し、参与観察で入らせていただいたクラスの外国籍児童 B、C、D の３名を調査対象とした。調査対象である３名は、いずれもブラジル国籍を有し、ポルトガル語を母語としているが、日本語の運用能力には大きな差がある。

以上の外国籍児童の実態を踏まえたうえで、彼らが授業内の書く場面のどこで何に躓いているのかを調査し、さらに授業内の書く場面で求められている力と照らし合わせて、彼らにどのような日本語指導を行っていくべきかを考察していく。

２．授業内の書く活動とそこからみえてくる課題

授業内の書く活動は、以下の３つである。

１つめは、板書を写す活動である。この活動では、１時間の授業の学習で重要なことを、教師が黒板に書き、それを子どもたちが自身の学習の足跡としてノートに書き写すという活動が行われ、「～しよう。」という表現が多く使用されていた。

２つめは、問題や質問に対して書いて答える活動である。この活動では、教師が訊いていることや教科書等に書かれている問題を理解し、それに対する答えを自分なりに考え書く活動が行われていた。ここでは、デス・マスの丁寧な表現と、テストの問題に出てくる命令的な表現が使用されていた。

３つめは、１時間の学習を通して学んだことを書く活動である。この場面で多く見られる活動内容は、１時間の学習を通してわかったことを「〇〇が分かりました。」のような表現を使用して書かれていた。

以上３つの活動場面に見受けられた外国籍児童の課題として、以下の３点を考えた。

① 漢字を書くこと、読むこと
② 書く活動で出てくる日本語表現を理解すること
③ 自分の言葉で自分の考えを表現すること

３．学校及び教師の支援

学校全体で取り組まれている外国籍児童への支援活動は、①子ども達が読書できる環境をつくること、②外国籍児童の日本語能力に合わせた環境をつくること、③教材の工夫をすること、がみうけられた。授業内で行われている教師の支援活動としては、①質問や指示の表現を変える、②支援の対象となる子と同じ母語を話すことができる児童と活動を共にさせる、③新しい語彙が授業内に出てきたときに、それがどんなものを意味するのかを確認する、という支援が行われていた。

このような、学校や教師が行っている様々な支援活動の中で、特に外国籍児童の書く力が伸びた理由として考えられることとして３つ挙げられる。１つ目は、読書の機会の増加による書き言葉にふれる機会の増加、２つ目は、教師の質問表現の変更、３つ目は、授業以外の時間に言葉を使った活動を取り入れたことである。

今後彼らの書く力を伸ばしていくには、この３点を意識し、指導を行っていく必要があると考える。

４.書く力を身につけるための支援方法

学習するために必要な力とは、「話す、聞く、読む、書く」という日本語での四技能に加え、学習内に出てくる様々な語彙や日本語表現を理解する力であると考える。

そこで、これまでの外国籍児童が書く活動で抱えている課題や、文部科学省などが彼らに身につけるべき力として望んでいる力、これまでの支援方法とその結果から、外国籍児童に対する支援として以下の３点を提案したい。

① 文字にふれ、アウトプットする機会を増やす
② 日常生活の中で使用する言語を授業内で使用する
③ 語彙を増やす

「文字にふれ、アウトプットする機会を増やす」という支援は、日本語で自分の考えを表すという力を養ううえで効果的であると考える。具体的な支援方法として、日記、良いとこみつけ、文字写しを提案する。

「日常生活の中で使用する言語を授業内で使用する」という支援は、日常生活で使う日本語を理解できる外国籍児童に効果的であると考えられる。ゆえに、今後は児童が日常的に使用する言語についてさらなる調査を行うことが重要であると考える。

「語彙を増やす」という支援は、教師が発言した言葉の意味が理解できず、学習が止まってしまうような児童に効果的であると考える。具体的な方法として、マインドマップを提案する。マインドマップを使った授業の実践とその後に行われたアンケートの調査からマインドマップの学習ツールとしての可能性を研究した上田（2011）は、情報整理力や記憶力などの力を養うことができると指摘している。

また、中学校においてマインドマップを活用し、その実践報告を行った代島・庄司（2016）による国語科における実践から、文章の構成を捉えやすくなり、段落の働きなどを理解することができるなどの効果を指摘している。

このように、マインドマップを活用することで、授業内で使われる語彙を増やすだけでなく、授業に参加するために必要な四技能等様々な力を養うことができると考える。

おわりに

今後は、本稿で提案した支援方法を実践し、有効性を明らかにする必要があると考える。また、外国籍児童が日常生活の中で使用している言語実態を明らかにし、どのような日本語表現であれば理解できるのか、把握する必要があると考える。

参考文献

・上田喜彦（2011）「マインドマップの学習ツールとしての可能性に関する実践的研究」『総合教育研究センター紀要』10、1-28 頁、天理大学人間学部総合教育研究センター
・勝原亜希子（2001）「中国帰国児童の教科学習支援に関する研究--在籍学級における算数科学習の調査から」『教育学研究紀要』47 (2)、353-357 頁、中国四国教育学会

・河口幸子（2004)「外国人児童の教科学習支援に関する研究―小学校算数授業に見られる発問形式の分析を中心に」修士論文、愛知教育大学大学院教育学研究科
・菊地悠（2012)「外国人児童生徒の在籍学級における教科支援―理科指導に関する考察―」修士論文、愛知教育大学大学院教育学研究科
・代島克信、庄司康生（2016)「中学校における「マインドマップ」導入の実践報告 ： 中条中学校における協同学習と言語能力の育成」『埼玉大学教育学部教育実践総合センター紀要』15、121-128 頁、埼玉大学教育学部
・藤田彬、田村直良（2012)「作文事例に基づいた児童の「書くこと」に関する学習傾向についての分析―小学 4 年生による紹介文・感想文を中心に―」『言語処理学会　第 18 回年次大会発表論文集』987-990 頁、横浜国立大学大学院環境情報研究院
・宮崎加代子（2015)「「文章を書く力」をめぐる課題と指導―大学一回生の作文分析から―」『大阪総合保育大学紀要』9、29-42 頁